

哲学の話

感覚・知覚とは何だろう...

感覚・知覚とは何だろう...

05/5/24

感覚とは何なのだろう。人類にとって、無くてはならない存在。一方でこれが人類の永久の研究対象。僕はそう思っている。その理由だが、まず感覚を数値として計るには、脳の解明が先行していなければならない。なぜなら、脳に来た最終信号の処理こそ、人間の感覚が感じ取ったものであるのだから。

客観視する一番の方法は、数値化することだ。ならば、脳が数値で表せないかもしれない悲観は置いて、まずは必然性としてあげてみた。そして、実際は未だに脳の機能の半分も解明されていない。なぜなら、生きている脳を測れないからだ。生きている状態の脳にセンサーをつける(埋め込む)のはムツカシイ。

だが、実験を試み、統計分類して、尚且つ、人間の脳とのかかわりを間接的に解析している学問があるのではないか。そう、それが”Human-Science”こと、”心理学”だ。

今日は大学で心理学の講義があった。感覚・知覚の話だ。感覚は、感覚器官が感じ取ったのを電気信号で送り、その結果、特定の生理的反応を起こすこと、知覚はその信号が中枢で処理されて起こる、心理的体験だそうだ。

ちょっと余談だが、僕はMATRIXを3章全て見た。あの作品は、僕が一番好きな映画の一つだ。現実社会が、虚像だったという構成に、ありがちな未来戦争とのギャップが素敵だったが、何よりも、脳の存在を強調した作品だった。と思う。

なにせ、プラグをつないだらMATRIXに入れるのだからねえ。生体反応によって、現実世界とリンクしているところが尚、素晴らしい。現実世界で死んでしまうのだから。当時、プログラミングのために生きていた僕としては、この作品は強烈な作品だった。浪人中なのに、MATRIX全部借りて見直したくらいだ。もう10回以上は見ている。

ところで、この作品にもある概念がある。”感覚”とは脳で処理されることであるということだ。これはわかる。しかし、感覚の概念だけでは表せないものがある。それこそが”知覚”なのではないだろうか？知覚はいわばスパイスだ。感覚器官が感じたものを情報として送り処理し、だが中枢で”人間的な”付加が加えられる。

たとえば、だまし絵などはその典型例だ。エッシャーが特に有名だが、人間は知覚の存在で、一種の錯乱を起こすことがある。そこには、人間の脳が情報選択を行っていることが理由に挙げられるのだが、背景としての”地”と、明瞭な形を持つ”図”の区別がしにくいと、人によって、いや、そのときの心理状態ですら、見方を捻じ曲げてしまう。

”こうなのだ”と思ったら、だまし絵は片方の絵として認識されてしまう。でも、ちょっと見方を変えると、はっきりと別の存在として認識できる。つくづく不思議な脳だと思う。これらを解析する上で、心理学ではより人間の生と密接にかかわっている。

そして、こういった結果を受けて、僕はMATRIXを自らの手で作り上げたいと思うのだが、これが僕の大きな大きな”夢”なのです。

記事の作成者

この記事は、管理人のMORIOが作成しました。

このページへのリンクはフリーです。転載も許可しています。転載の際は内容を変えないようお願いいたします。また、このページを利用して何かおきても、作成者のMORIOは一切、責を負いません。自己責任でご利用くださいネ！（なんと無責任な・・・）

この記事に関する質問、苦情、要求などがございましたら・・・

master@morik.net

宛てにメールをお寄せください。